

序

大戸千之先生は、一九六五年に京都大学文学部史学科西洋史学専攻を卒業され、続いて同大学院の修士課程・博士課程へと進み、七〇年に中途退学をされています。同年四月から二年間、京都大学文学部助手を勤められ、七二年に立命館大学文学部助教授として着任されました。八四年に教授に昇任。以来、文学部の教員として三六年にわたる教育と研究、校務に関わるお働きをされました。

この間、学部の役職としては、調査委員長（八八年度）、二部協議会主事（九一年から二年間）、大学協議員（九八年から二年間）、文学研究科長（二〇〇三年度）を歴任されたあと、二〇〇四年度に文学部長に就かれました（杉橋前学部長の残存任期の一年間）。折りしも、文学部は、学部改革を推進している最中で、短い期間ではありましたがきっちり重要なお仕事を果されました。また、全学役職としては（学部長職も含まれますが）、二〇〇〇年から二年間、総合情報センター副センター長（学術情報担当）を務められました。

大戸先生のご研究の専門分野は、西洋古代史、特にヘレニズム時代の都市や文化変容を主な研究領域とされています。六八年に、「セレウコス期の支配とオリエント人」という論文を『西洋史学』にご発表以降、これまでに多くの論文を執筆、公表され、その結実として九三年に、ご著書『ヘレニズムとオリエント―歴史のなかの文化変容―』（ミネルヴァ書房）を刊行されました。これらのご業績によって、翌九四年、先生は京都大学から学位（博士）を受けられました。

先生は、きわめて温厚かつ誠実なお人柄の持ち主であることは衆目の一致するところです。現在は大学院に進んでいるかつてのゼミ生の「思い出」の文章に、「大戸先生のゼミは、いつも和やかな雰囲気のもと進められます」と記されています。一方、「ゼミ生の報告に対して『何をもってそう判断するのか』というおなじみの大戸節は、先生の歴史学そのものに対する姿勢を垣間見せ・・・」（『クヴェレ』第一四号より）とあって、こと教育・研究に関しては厳しい姿勢を貫ぬかれておられます。これまで、長い期間にわたって、先生は多くの優秀な学生を育て、世に送り出してこられました。ご定年という一つの節目を迎えられるにあたり、在学生・卒業生・学部教職員と共に、先生に感謝の意を表わしたく存じます。

私は、先生が二部協議会主事を務められた時、学部の二部協議員として一年間、ご一緒したことがあります。ちょうど二部（夜間）の

改革（存続か廃止かをめぐっての）論議が過熱している時で、会議では激しい意見がとびかっっていました。発言が特に多いというわけではありませんが、先生は、いつもの確で冷静な意見を述べられていたのが印象に残っています。先生は、また、物事に対してある程度の距離をおいて対され、つねに客観的に捉える姿勢をもっておられますように見うけられます。歴史家としての習性なのか、ご性格からくるものなのかはわかりませんが、先生のこうした慎重な姿勢と判断とは、私たち後進は学ばなければならぬと思います。今後共、文学部の進む方向への有益なご助言をいただけますことを願っております。

大戸千之先生に対して、学校法人立命館は名誉教授の称号をお贈りし、その長年のご貢献を讃えます。本会は、ここに、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表わし、このご定年記念の論集を編んで、先生に献呈いたします。ありがとうございます。

二〇〇八年二月

立命館大学人文学会会長

文学部長 木 村 一 信